

## 自己評価報告書

平成23年 4月18日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2012

課題番号：20520057

研究課題名(和文) 社会学年報学派の宗教研究に関する体系的研究

研究課題名(英文) A systematic study on the religious studies in the school of /' *Année sociologique*

研究代表者

山崎 亮 (YAMAZAKI MAKOTO)

島根大学・法文学部・教授

研究者番号：40191275

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：宗教社会学、宗教人類学、社会学年報学派、デュルケーム、ユベール、モース

## 1. 研究計画の概要

本研究は、デュルケーム、ユベール、モースらの共同作業に基づく社会学年報学派の宗教研究の全体像を明らかにし、その宗教学史的意義を再検討することを目的としている。この目的達成のために、

(1) l'Institut Mémoires de l'édition contemporaine (IMEC)の Fonds Mauss に所蔵されているモース宛ての書簡や草稿など、一次資料を分析・検討する。

(2)ユベールとモースの共同作業によって刊行された著作、とりわけ「供犠の本質と機能に関する試論」(1899年、以後「供犠論」と略記)ならびに「呪術の一般理論素描」(1904年、以後「呪術論」と略記)を、関連する他の論文・書評等も視野に収めつつ、精細に検討し、その生成過程を具体的に解明する。

(3)併せて当時の宗教学史的な時代背景や影響関係、さらには社会的・文化的コンテクストも考慮に入れながら、社会学年報学派の宗教研究における共同作業の内実を解明し、その全体像を提示する。

## 2. 研究の進捗状況

(1)ここまでの3年間、毎年 IMEC での文献調査を実施し、Fonds Mauss の一次資料——「供犠論」の草稿、フレーザー、シルヴァン＝レヴィ、ユベールらによるモース宛書簡等——の分析に、着実な成果を上げている。

(2)「供犠論」の生成過程に関しては、数種類の論文草稿、ユベールの書簡、デュルケームの書簡等の分析に基づき、デュルケーム、ユベール、モース三者による「隠された共同作業」の内実を、かなり詳細に解明することができた。当初、デュルケームの発生論的視点から開始された共同研究は、やがて三者の共

同作業のなかで、共時的かつ構造論的視点を芽生えさせていく。それは、以後の学派に共通する宗教研究の基本的方向性となるのだが、さらにデュルケームには、儀礼が社会活性化の機能を果たすという、新たな発想をもたらすことになる。要するに、「供犠論」の「困難で混沌とした生成」は、ユベールとモースによる宗教研究の出発点であると同時に、デュルケームの宗教研究の転回点でもあった。この間の事情は、とりわけ「供犠論」の結論部分に暗黙のうちに示されている。

(3)このような研究成果の一端は、論文⑤や学会発表②・④などで公表している。

## 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(1)「2. 研究の進捗状況」でも触れたように、デュルケーム、ユベール、モースの共同作業の内実の一端を明らかにすることができ、「供犠論」の生成過程について、従来の内外の研究には見られない、きわめてオリジナルな解釈を打ち出すことができた。

(2)フレーザーやシルヴァン＝レヴィなど、学派外の研究者からの影響関係についても検討を加えることができた。

(3)以上のような宗教学の理論的ないしは思想的前提の考察を通じて、宗教研究の方法論的枠組みの反省を深化させ、これに基づいて、さまざまな次元における現実の宗教現象の実証的研究をいっそう深く展開することが可能となった。

## 4. 今後の研究の推進方策

(1)引き続き、Fonds Mauss の一次資料の発掘・分析を通じ、当時の社会的・思想的なコンテクストも考慮しながら、「供犠論」成立

の背景をいっそう深く探るとともに、学派によるトーマイズム理解の変遷を解明し、さらに「呪術論」の生成過程へと分析を進めたい。(2)新たな宗教学史的問題として、このような社会学年報学派による宗教研究の視角が、日本の宗教学的・人類学的宗教研究の成立にどのような影響を及ぼしたのか、デュルケーム『宗教生活の基本形態』を翻訳した古野清人、モースに直接師事した松平斉光——帰国後祭礼研究に一時没頭した——や山田吉彦——モース『贈与論』を翻訳し、独自の「部落論」を展開した——らの業績を分析・検討することによって解明したい。その作業は、社会学年報学派による宗教研究の宗教学史的意義の探求という、本研究の目的達成をいっそう深化させるものとなるだろう。

#### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 山崎 亮、脳死論の現在——臓器移植法の改定をめぐる、社会文化論集:島根大学法文学部社会文化学科紀要、7、pp.145-162、2011、査読無 (<http://www.lib.shimane-u.ac.jp/0/collection/repo/>)
- ② 山崎 亮、島根県民俗学関連雑誌等目次総覧、松江市史研究、2、pp.39-72、2011、査読無
- ③ 山崎 亮、石見地方における「森神」をめぐる——明治初年「神社書上帳」を手がかりに、山陰民俗研究、15、pp.39-59、2010、査読無
- ④ 山崎 亮、横塚晃一思想と「宗教」——1970年代「青い芝の会」の運動をめぐる、島根大学社会福祉学論集3、2010、pp.54-68 (<http://www.lib.shimane-u.ac.jp/0/collection/repo/>)
- ⑤ 山崎 亮、ユベール・モース「供犠の本質と機能に関する試論」の生成——社会学年報学派の宗教学思想Ⅰ、社会文化論集:島根大学法文学部社会文化学科紀要、5、pp.63-84、2009、査読無 (<http://www.lib.shimane-u.ac.jp/0/collection/repo/>)
- ⑥ 山崎 亮、宗教民俗とコミュニケーション——講演「日本の神々:出雲地方の神話と祭礼」をめぐる、島根大学教育学部紀要、42別冊、2009、査読無 (<http://www.lib.shimane-u.ac.jp/0/collection/repo/>)

[学会発表] (計5件)

- ① 山崎 亮、「金屋子信仰」再考、「山陰の製鉄業」古代文化センター客員研究員検討会、2010.12.23、古代文化センター
- ② 山崎 亮、社会学年報学派の宗教学思想、社会文化学科研究交流会、2010.3.16、島

根大学法文学部

- ③ 山崎 亮、浜田の国学者藤井宗雄の著作について、第13回山陰宗門改帳研究会、2010.2.5、島根大学法文学部
- ④ 山崎 亮、デュルケームとモースの「隠された共同作業」——「供犠論」の生成、日本宗教学会第68回学術大会、2009.9.12、京都大学
- ⑤ 山崎 亮、石見地方の森神信仰、山陰民俗学会平成21年度年会、2009.8.2、松江テルサ

[図書] (計2件)

- ① 池上良正・島菌進・山崎亮他、丸善、『宗教学事典』(執筆項目=原始心性、トーマイズム)、2010、659p(44-45,278-279)
- ② Marie-Jo Thiel, Yamazaki Makoto et. al., Presses Universitaires de Strasbourg, *Donner, recevoir un organe: Droit, dû, devoir*, 2009, 384p (chap. 6, La relativisation de la notion de mort : la mort cérébrale et la transplantation d'organes au Japon, pp.85 -97)